

雨期の定住の修行を終えたお釈迦さまはヴェーサーリーを後にして、説法の旅を続け、パーヴァー村に至ります。

パーヴァー村では鍛冶職人のチュンダの持つマンゴーの林に滞在しました。自分の林にお釈迦さまが滞在していることを知ったチュンダが喜んでお釈迦さまのもとに行くと、お釈迦さまはチュンダのために、お説法をしました。

チュンダはお説法を聞き終わるとお釈迦さまを供養の食事に招待し、その夜の間に歯ごたえのある食べ物、柔らかい食べ物と、多くのきのこ料理を用意しました。

次の日お釈迦さまはチュンダの家に赴き用意された席にすわると・・・、
「きのこ料理を私に。その他の食べ物を修行僧らにあげてください・・・。」

とチュンダに頼みます。そして料理を召し上がり、残ったきのこ料理を穴に埋めるように弟子たちに指示をしました。お釈迦さまはチュンダに説法をしてその場を去ります。

さて、きのこ料理を食べたお釈迦さまはその後、激しい腹痛に見舞われました。苦しみながらもお釈迦さまは弟子アーナンダに「クシナーラーに行こう」と話し、歩き始めます。

休みながらも歩みを進め、弟子アーナンダに・・・、
「私が死んだ事で、誰かがチュンダに後悔の念を起こさせるかもしれない・・・。」

だが仏陀となる者がお悟りの際に頂いた食事と、今回のように供養の食べ物食べて、
煩悩の無い境地、つまり涅槃に入る際の食事は他の供養の食事よりもはるかに勝れた果報
があり功德がある・・・。」

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

とチュンダに伝えるように話します。チュンダの供養は、お釈迦さまが十二月八日におさとりを開かれた際に村娘スジャータから施された乳粥ちちがゆと同じように尊いものであるというのです。

お釈迦さまのチュンダへの深い気遣いを感じさせるお話です。

— 終 —